

Title	昭和七年度秋期研究旅行記
Sub Title	
Author	横田, 實(Yokota, Minoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.1 (1933. 4) ,p.148- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和七年度秋期研究旅行記

十月二十九日 土曜日

午後七時十分東京驛發急行列車にて東海道を西下す。一行は橋本教授以下十一名。

十月三十日 日曜日

午前五時五十八分京都驛着。直ちに構内食堂に入り朝食を認む。六時二十分到着の列車にて占部教授も一行に加はり、同三十五分大軌奈良行急行電車にて先づ中宮寺に向ふ。朝霧いまだ晴れやらぬ大和平野を、南に走ること一時間餘。その名も懐しき西大寺にて八木行電車に乗換へ、平端に至りてガソリンカーに身を移し、新法隆寺驛に入る頃には晴れ渡れる紺碧の秋空を見る。こゝより乗合自動車を驅つて法隆寺前に至れり。時に八時四十分なり。

先づ中宮寺を訪ふ。大山公の紹介により竹林薫氏既に来りて吾等一行を待てり。氏の好意に任せ導かるゝまゝに本堂に入る。薄暗き本堂の中央に本尊佛如意輪觀世音菩薩を安置す。推古佛として廣く世に知らる。その微笑せる温顔、眉宇の間に漂ひ、左足を蓮華の上に置き、折曲げたる右足に右手を置き、頬を軽く支へし所謂袈坐半跏の聖像は聞きしに優り、清淨優美にして感動せざるを

得ざりき。一度拜して美なり。二度拜して佳なり。その慈容に打たれ暫し恍惚とせり。傳承に従へば、本像は聖德太子の御作と稱せられ、飛鳥時代藝術の代表的傑作たり。

堂の一隅に硝子張の厨子の如きものあり。天壽國曼陀羅を藏す。記すまでもなく推古天皇、聖德太子薨去の後、橋夫人の懇願を容れ給ひ、采女等に勅し極樂淨土の眞相を刺繡せしめ給ひしものにして、其の長さ一丈六尺、周邊に龜甲形百個を聯ね、毎甲四字を縫ひ、其の製作の由來を記せり。今は僅に五分の一大の布地にその殘片の集貼を残すのみ。

本堂を出で庫裏にて茶菓の饗應を受け、九時三十分こゝを辭し直に隣接の法隆寺東院に赴く。院は廻廊に圍まれて有名なる夢殿を中央に、舍利殿・繪殿・傳法堂・禮堂などあり。先づ傳法堂に入る。古色濃き堂宇に本尊阿彌陀如來坐像を中心に、觀音勢至二菩薩立像、四天王その他十數體の像を安置せり。就中勢至菩薩像は温雅且つ明快なる趣を現し、本尊と共に天平盛期の一傑作たり。その建築は橋夫人の舊邸を施入せしものにして、當代貴族の住宅様式を偲ぶに足る。次いで歩を夢殿に運ぶ。夢殿は本名を上宮王院正堂といひ、見事なる八角圓堂にして、その建築は後世部分的補修を加へたりと雖も、天平十一年創建のものを今に傳へし超時代的建築なり。その本尊救世觀世音菩薩立像は聖德太子等身の像と稱せられ、古來祕佛として尊重せられしものにして、今現に拜する古拙の聖姿は如意輪觀音とは趣を異にし、また頗る優佳なり、その彫法は飛鳥様式を表示するに間然するところなく、推古佛として代表的の尊體なり。

東院堂を辭し、西に歩むこと二町餘にして中門前に至る。寺務所に至り刺を通じ説明の勞を乞へば六十路の高僧、心よく出で來れり。師の言に従へば、その昔現存の中宮寺の位置に斑鳩寺ありて之を中心とし東に中宮寺、西に法隆寺ありしと言ふ。中門は創立當時の佛を今に傳ふる建築にして、四間三面重層の入母屋造り大棟門にて輕快且全體に安定の感を與ふ。その柱が希臘式の手法に據れるは著名なることなるが、その中央に柱を置き、二門戸としたるは他の山門とその趣を異にせり。

中門を入れば正面に講堂、右に金堂、左に五重塔を見る。周圍に廻廊を巡らし、その配置に妙を得たり。古色蒼然たる金堂に入れば中央に南面して本尊藥師如來を安置せり。本像は金銅佛にて聖德太子御生前の誓願により、御母及び妃の冥福を祈らしめ給ひしものにして、止利佛師の作と傳ふ。その光背の銘に曰く

池邊大宮治二天下一天皇大御身勞賜時歲次丙午年召於大王天皇與三太子二而誓願賜我大病大平欲坐故將三造寺藥師像作仕奉二詔然當時崩賜造不堪小治田大宮治二天下一大王天皇及東宮聖王大命受賜而歲次丁卯年仕奉

とあり。蓋し日本最古の金石文なり。その他止利佛師の大作釋迦三尊法橋康勝作阿彌陀三尊等安置せり。就中須彌壇上の四隅の四天王は奇古簡朴の感を與へ、俗に百濟觀音として著名なる木彫の觀世音菩薩は、其の施されし着色剥落甚しきも、神韻縹渺世界絶無の靈像にして、その腰脚の丈長きは一入聖姿を美化せり。又玉蟲厨子橋夫人念持佛厨子は、當代藝術の粹をなすものにして、建築様式を窺ふに足り、その美術的なるに於ては讚美おかざるとこ

るなり。

印度、アジャンタ壁畫と共に世界に著名なる金堂の壁畫は豫想以上にその色彩の鮮明なるものあるに驚嘆せり。四大壁八小壁の圖様を一貫して之を見るにガンダーラ・ペルシャの様式を交へ異國的情調を味へり。唯堂内の暗黒にしてしかも剥落甚しきを以つて觀察を充分に爲し得ざりしは遺憾なり。

金堂を出で長廊を渡り寶物殿に入る。殿に珍寶稀物並に古墳出土品等陳列せり。

次いで五重塔下に至る。靜かに十二丈に垂とする古塔を仰げば、その悠然と青天に聳ゆる偉容は將に法身不壞の一大表幟たり。塔内に入ればその初層には、中心柱の四方に須彌山を顯造し、これを背景として構想せる維摩詰(東面)・彌勒佛(南面)・分舍利佛(西面)涅槃(北面)の群像を配置せり。殊に北正面の塑像は中央に金軀の涅槃像を現し、十大弟子七人、天人八部其の他憂愁の群像はその表情眞に迫り嘆賞に値せり。

五重塔を出で石臺を傳ひて行けば正面の講堂に至る。その建築は藤原時代のものにして本尊藥師如來、日光・月光兩菩薩並に四天王像を安置せり。本講堂にて毎年十二月十三日所謂講堂問答の古儀を施行すと言ふ。

かくて觀るべき多くの珍寶あれど他日に割愛し、古美術の歴史を辭し、再び中門を通り南大門を出で寺前に至る頃には既に正午に近ければ附近の茶亭に入り晝食を認む。

十二時三十分乗合自動車の便を得、藥師寺に赴く。十五六分に於て山門前に至る。古雅な山門を潛り境内に入れば寂寞として人

影なし。本寺は天武天皇の御代畝傍町の木殿に創建せられしを、養老二年に平城右京六條二坊の地即ち今の場所に移されしものなるが、伽藍の多くは兵火により灰盡に歸し、優美なる三重の東塔のみが白鳳期の代表的建造物として残存せり。境内の一隅なる佛足堂に入る。堂は天平勝寶六年文屋真人智努王その亡夫人茨田女王の敬造供養せしものにして、石の上面に釋迦佛の足跡に干輻輪相轂輞魚形金剛杵等を刻み側面に緣起の銘文を刻せり。佛足石の後に有名なる光明皇后の御詠吟と傳ふる御歌を刻みし碑あり。次いで東院堂の扉をたゞき、天武天皇の御代百濟王より奉獻せしと傳ふ聖觀世音菩薩立像を見る。金堂の三尊と並びて白鳳期を代表する雄作なり。金堂に入れば、青銅の黒き光輝に包まれて、藥師三尊の悠然と居坐するあり。その威嚴に充ちし堂々たる聖姿は、フエノロサ氏をして世界無比なりと激賞讚美せしめしも亦宜なり。中尊台座の四神は古拙なれど優秀の作なり。沈黙數刻、先を急ぎたれば他日再來を心に誓ひつゝ、藥師寺を辭せり。時に一時五分。藥師寺より唐招提寺までは一筋道なれば歩けり。秋もやうやく終りに近づきたれど空は快晴、汗ばむ程暖かなり。道の兩側の農家に憎き程柿多し。談笑の裡に唐招提寺前に至れり。本寺は聖武・孝謙兩天皇の勅願に依り唐の高僧鑑眞來朝し特に授戒の一寺として鎮護國家の爲め開創したりしと言ふ。境内に入れば正面に金堂あり。これを中心にして東に鼓樓及び禮堂・舍利殿相前後してあり。西方に戒壇・鐘樓など金堂・講堂の間に相對せり。山門を入れば忽にして幽棲閑寂の感に打たれ、懷古の情自と湧出でたり。金堂はその棟の兩端に鴟尾を上げたる美事なる建築にして、天平年間

草創の金堂の中にて今に傳へし唯一のものと稱せられ、本尊盧舍那佛を安置せり。その他千手觀音・藥師如來等著名の像あり。堂内に本尊及び千手觀音の光背の拓本をかゝげたるあり。その圖様の繊細華麗なる、將に當時の藝術を物語るものなり。又講堂は元明天皇の御代、平城京の朝集殿を賜はりしものにして、奈良朝宮殿建築唯一の遺物なり。一時五十五分こゝを辭去し、その名もゆかしき西の京より電車にて奈良に向ひ、二時二十分奈良に着せり。先づ世界の寶庫正倉院に向へり。梵鐘の古雅なる響に奈良の昔を偲びつゝ、東大寺南大門前を過ぎ、左して朱塗の長き廻廊に沿ひ、小坂を下り行くこと五六町にして正倉院前に至る。刺を通じて入る。幸に翌日より御物蟲干の期なれば、扉開かれ、その陳列の模様を推知するを得たるは甚だ愉快なり、時に和田軍一氏黑板博士原田淑人氏の顔も見え、談笑數刻。三時正倉院を出で、二月堂の側を通り、三月堂を訪ふ。本堂は一に法華堂とも稱し、東大寺最古の伽藍なり。その前方部は禮堂にして、鎌倉時代に増築したるものなれば、天平鎌倉兩時代の建築様式を容易に比較し得。本尊不空羂索觀世音菩薩・日光・月光兩菩薩並に四天王など天平盛期の名作なり。本尊の寶冠、天蓋、光背また華美にして最も世に喧傳せらるゝものなり。三時二十五分、三月堂を辭し、博物館に至り、國寶、稀物、佛像、佛畫等をあまねく巡覽せり。就中玄關正面の百濟觀音模像を見る時、舊知の人に再會せしが如き思慕の情さへ起り甚だ愉快なり。四時、博物館をあとに、春日神社に詣で、直ちに三笠山に向へり。山麓に至る頃には一行やうやく疲勞の態なり。されど五時、頂上を極めたり。

山頂より眺むれば、夕陽既に西に傾き、微光の中に東大寺の大伽藍の浮き出でたる、遠く南の方に大和三山の髣髴として横たはれる。蜿蜒と帯の如く流るゝ木津川も夕霧の中に消へ、さながら昔時の風光そのままの佳景に暫し疲労も忘るゝ心地なり。何處の鐘樓より流れ来るか餘韻嫋々たる鐘の音に一入懐古の情を唆られたり。かくするうちに冷氣ひし／＼と身に迫り、星さへ出でしかば裏山道を急ぎ下り、六時十分、無事宿に着き、和氣霧々のうちに終日先導の勞を執られし竹林氏を圍み、晚餐を共にし、この旅行の第一日を了へたり。

十月三十一日 月曜日

眞夜中に雨の音を聞きしも明くれば一點の雲なき日本晴れなり。午前七時五分宿舎を出で、大軌奈良驛より神武天皇御陵に向へり。途中西大寺にて乗換へ御陵前にて下車、直ちに御陵に參拜す。再び電車にて次驛なる橿原神宮に詣で、歸途驛前なる考古館に立寄る。同館は考古學參考品發掘品各種の模型等を陳列せり。これより飛鳥地方の帝都の址など探ねんとて、先づ程近き久米寺に向ふ。昨夜の雨に濡れたる田舎道を行くこと七八町にして達す。久米寺は一に來目寺に作る。聖徳太子の御弟久目皇子の本願によりて建立せられたるものなれど、傳説には久米仙人の造立なりとも傳ふ。

久米寺より徒歩にて岡寺驛前に出で、二臺の自動車を得て橋寺に赴く。同寺は聖徳太子御誕生所にして、寺傳によれば、推古天皇の十四年太子勝鬘經を宮中に講讀されしところ、蓮花の降りし靈瑞により、この別宮を施入して精舎とせりといふ。これこの寺

の創始となす。その寺運繁昌の時は堂宇六十餘寺域も十七萬餘坪に上りしとすることなるも、今は境内當時の名残として、たゞ三重塔の礎石あるを見るのみ。寺寶を見るべき餘裕を有せざりしも、我國古帝都の址なる飛鳥川の流域を展望して暫し懐古の情に耽りたり。次いで向側なる川原寺即ち弘福寺址を訪ねたり。本寺は元亨釋書・伽藍開基記等には齊明天皇の元年創建せられしと傳ふるも、七大寺巡禮記には敏達天皇十二年蘇我馬子の建立となす。要するに建立の年代は不明なるも、齊明天皇以前より存せしことは日本書紀孝徳天皇白雉四年の條に見ゆるによりて證せらる。この地は即ち孝徳(齊明)天皇の皇居川原宮或は川邊宮の遺址なり。境内には今はたゞ金堂の礎石二十四個、塔址の礎石十九個を残すのみ。昔日を偲ぶ面影更になし。

再び車上の人となり西國第七番の靈場岡寺を訪ふ。岡寺は別の名を眞珠院龍蓋寺と稱し天智天皇の二年飛鳥岡本宮を改め、寺とせしものにして、歴代の勅願所なり。岡本宮は齊明天皇が飛鳥川原宮より移り住み給ひし皇居なり。弘法大師弓削道鏡もこの寺に住せしことあり。寺は丘の東部の中腹に在り。昨夜の雨に紅葉も鮮かに眼覺むる許りの美しさなり。境内の一隅に龍蓋池の名蹟あり。その寺傳に曰く、

當池は人皇三十八代天智天皇御宇此邊りの山に惡龍見れ出沒その慘害名狀すべからず。人々安き思ひをなきゞりき。然るに當寺の開山義淵僧正を天皇の寶座近くに召したまひかゝる惡龍を退治するは武力を以てその功をよくするとおぼへたるにあらざれば、退治せよと勅令をうけ遂に毒龍を退治したれば幸ひ邊り

の池に毒龍を投げこみ大石に阿字を書して再び出現すべからずと此石を以て蓋をなしたる處故に龍蓋池と稱し爾來勅を蒙りこの池に堂宇を建立して龍蓋寺と稱す。因みにいふ旱魃に會するときは附近の農民此の池水を濼へ阿字石を動かすときは潤雨沛然と來り農民蘇生の思ひをなし靈驗を歌頌すること其例少なからざりき。

と。又寺内にもとの阿本宮より移せしと傳ふる樓門あり。その樓上に古佛九體を安置す。蓋し當山金堂の佛像たりしものと稱す。何れももとより信ずるに足らず。

再び車を急がせ凸凹甚しき惡路に惱されつゝ飛鳥寺に至る。されど、華やかなりし昔日の姿もなく、荒廢したる安居院あるのみ。寺は崇峻天皇の元年に聖德太子が蘇我馬子と協力し佛法興隆の爲建立せしものなり。院内には止利佛師の作と傳へらるゝ大佛を安置す。かの藤原鎌足出世の端緒として著名なる蹴鞠の庭もこの境内に在りしとか。

次いで飛鳥座神社に詣で、その名もゆかしき飛鳥川に沿ひて走る。行くこと數町、豊浦寺址を訪ぬ。もし普通に傳ふるが如く、この地が蘇我稻目の第宅を喜捨せる向原寺の遺址なりとすれば、即ち我國最初の佛寺址として認めらるべきものなるべし。その他、酒磐・石舞臺・鬼の俎・鬼の厠等皆他日に割愛して、一路櫻井驛に至れり。時に十一時五十分なり。直ちに附近の茶亭に入り空腹を肥せり。

十二時二十五分、乗合自動車にて多武峯なる談山神社に向ふ。同四十五分にして車を降り、古雅なる屋形橋を渡り神山に入る。

華嚴阿舎の小瀧を過ぎ、古木鬱蒼として晝なほ暗き杉林の間を上ること五町餘。林は急に開け、見渡す限り雜木紅葉し、背後の老松古杉と相映じ、その間朱塗の社殿高塔の聳えたる眼ざむるばかりの美しきなり。數十段の階を數へて拜殿に至る。古雅のうち古昔の隆盛を偲ばすこの堂塔は、一に藤原氏の榮華を物語ると共に、日光廟に比すべき豪華を極めしものと言はざるべからず。拜殿に寶物を陳列するあり。その主なるものを記せば左の如し。

一、後花園院院宣

一、後陽成天皇御宸筆

一、織田信長公黒印狀

一、豊臣秀吉朱印狀

一、大僧正天海(慈眼大師)書狀

銀子三枚ヲ音信トシテ送ラレシ禮狀

一、般若心經

青蓮院宮尊眞法親王筆

一、法華經

なほ毎年十一月七日の祭禮當日に蹴鞠の古儀を施行すと言ふ。一翹を欲すれど先を急げば直ちに下山、二時十五分再び櫻井驛に歸り三輪に赴く。三輪山は町の東端に在りて、見るからに老木蒼然として神體山の感深し。山麓なる拜殿に至り、拍手打てば木靈に響き又莊嚴なり。歸途茶店に少憩し、三時、三輪驛に出で、同十二分、汽車にて丹波市に向ふ。車窓より圓錐形の三輪山に別れを告げ、晩秋の大和の風光に見入るうち忽ち丹波市に至れり。直ちに自動車を得て天理教圖書館に向ふ。行くこと七八町にして

町の郊外に出づ。この附近天理教本部・天理教外國語學校・天理
教圖書館などあり。當日休館なりしに拘はらず館員の好意により
て圖書館内に入り限なく參觀せり。その研究室・讀書室・講堂等善
美を極め、その設備の完備せるに驚嘆せり。四時三十分、再び自
動車を急がせ、布留の街道を上ること十三町にして石上神宮に至
る。薄暗き參道を行けば、新しき朱塗の廻廊に圍まれて古色深き
拜殿あり。佐土布都の神を祀る。社務所に至り寶物を拜觀せんと
欲す。されど吾等の訪問唐突にして且宮司不在なりしかば、他日
再來を期し、四時五十分、自動車を急がせ大軌天理驛に至り、五
時五分發の電車にて京都に向ひ、六時二十七分七條着。直ちに旅館
に入り、第二日の旅程を了へたり。

十一月一日 火曜日

午前八時十分二臺の自動車に分乘し、京都帝國大學に向ふ。正
門に入れば遇然長崎の武藤長藏氏に會せり。氏と同道して文學部
陳列室に至る。陳列室は考古學參考品を主とし、その他歴史・地
理學等の參考品數萬點を藏せり。陳列所は中庭を巡つて作られ、
此處に研究室・書庫・教官室等も在り。先づ玄關より入れば、耶蘇
教徒墓碑並に大秦景教流行中國碑模型あり。斜に秋陽をうけたる
長き廊下を通り考古學第一陳列室に入る。こゝは主として本邦及
び支那の考古學參考品並に發掘品を陳列せり。その内容豊富にし
てその施設の完備と配列の整然たる國內に於ては當に他に比な
るべし。その二三を記せば南河内郡國府村衣縫發見の人骨二體の
如きよく屈葬の實狀を示し、殊にその一は耳環を有せり。又各種
の土器に雜りて異彩を放てるは彩色土器にして、甘肅省發見のも

の如きアンダーソン氏が西方文化の影響なりとせられしもの
なり。その他スキタイ式青銅各種遺物など注目に値せり。また本
邦繩文、彌生各式の土器、及び石器石鏃は勿論、各地發見の鏡、
古代銅利器等貴重なる參考品少からず。なほ梅原氏將來のアフガ
ニスタン發見佛頭四個、及び印度健駄羅發見石刻童子周匝浮彫塔
婆基部・希臘式佛像浮彫など逸品枚舉に遑あらず。第二室に入れ
ば主として歐洲の考古學參考品發掘品あり。その二三を記せば左
の如し。

一、埃及帝國時代のアラバスター石製容器

一、バビルス(コプト文書)

一、埃及スーダンの彩式土器

一、西亞楔形文字泥章

一、ギリシヤ土器

一、瑞西發見の石槍

その他新舊石器、土器模型等を陳列せり。見學中濱田博士登校せ
られしも、直に授業に行かれたり。

ついで、隣接の國史研究室に入る。その階下は日本土俗に關す
る參考資料を陳列せり。室の一隅に三個の甲冑あり。これ末永雅
雄氏の古代甲冑研究の結果各地古墳出土の甲冑斷片を蒐集しその
復原を完成せられしものにして各斷片には總て漆を塗布し、以て
その腐蝕を防げり。その階上は古文書室なり。皇室關係史料を始
め、切支丹關係文書殊に近世史料を藏せり。

なほ琉球接貢船歸帆ノ圖(六枚屏風)並に交趾日本町の圖など
あり。後者は鎖國以前海外に於ける邦人の生活狀態を窺ふに足

る。次いで地理學陳列室に至る。一般地圖・各種模型・測量器具等地理學一般の参考品に充滿せり。就中西曆一六四二年即ち寛永十九年製作の日本最初の地球儀は注目し値せり。更に史學書庫並に西洋史・東洋史各研究室を順次見學せり。最後に羽田部長を訪ふべく東洋史教官室に至る。同室に回鶴文書原本並に各種古錢模型等を見る。會々羽田部長登校せらるゝあり、談笑の中に正午に及べり。されば教授一同は羽田氏に導かれて教授食堂に行かれ、學生は校内食堂にて晝食を攝る。かくて休憩三十分餘、乃ち學園を辭して東方文化學院京都研究所に赴く。先づその建築の宏壯なるに驚き、刺を通じて入り講堂書庫研究室等を巡覽せり。その書庫は地誌に關する書籍甚だ多し。その設備に至りては最新式の施設を施し利便慰安共に備はれり。その階上展望臺に昇れば、洛中洛外の風光一眸の中にあり。降つて研究室を見學す。研究室は修道院を模し清楚なる様式にて芝生の中庭を圍み十數室を設けたり。その中庭には井戸と泉水とを配置し情趣を添へたり。各研究室には必要の書籍辭書一般を備へ、以て研究に便せり。その何れを見るも美望に堪えず、眞に研究室の必要を痛感せり。見學を了へ應接間に憩ふこと十數分。二時、更に博物館に向ふ。時に浮世繪展覽會の開催中なりしかば觀覽者溢るゝばかりなり。先づ東館に入れば、浮世繪各派の大作に滿ちたり。その西館には國寶の佛像佛畫古美術品等優秀の作を集めたり。その珍品の二三を記せば

阿彌陀三尊二十五菩薩來迎圖 一幅

山越阿彌陀如來像

傳源信筆

十二天像

傳宅麻呂勝賀筆

足利持義像

傳春日行秀筆

三月經曼茶羅 一幅

筆者不詳

孔雀明王像 一幅

筆者不詳

獅子上文殊菩薩(木彫彩色)

(平安初期)

阿彌陀如來坐像(木彫金色)

源信作

銅鼓(支那製)

その他宮廷諸儀式御用具など、見るべき参考品甚だ多けれど、先を急ぎ三時十分、博物館を辭し、市電にて東山なる銀閣寺に向ふ。三四十分にして寺前に至り、總門に入り、中門を潛り、庫裡に至れば拜觀者群をなす。所謂銀閣寺は即ち慈照寺と稱し、臨濟禪宗の寺にして、八代將軍足利義政の別業たり。先づ東求堂に入る。本堂は義政生前の持佛堂たり。その東北に義政創意に係る茶室あり、同仁齋と稱す。東求堂の北に弄清亭と稱する聞香の間あり。各室に諸名家の墨蹟を陳列せり。就中秀吉公朱印狀・家康公黒印狀・呂宋古渡の茶壺等興味を引く。次いで銀閣に入る。銀閣は重層柿葺の寶形造にして、上層を心空殿、下層を潮音閣と稱す。東求堂と共に東山時代の築造なり。その東方に月待山、西面に竹林を配し、南及び東には林泉あり。相阿彌の作と傳ふ。池泉竹木奇石の配置に妙を極めたるのみならず、東求堂の前庭に杭州西湖を模せる銀沙灘と向月臺を造れるは、他にその比類を見ざる所なり。四時三十分銀閣寺を辭す。

夕闇せまりたれど更に自動車を驅り南禪寺に向ふ。當山は臨濟宗南禪寺派の大本山なり。大方丈は慶長十六年皇居御造營の時、後陽成天皇もとの清涼殿を賜ひしものにして、當時の宮廷建築の

様を推知すべし。それに續きて小方丈虎の間あり。同年徳川氏もとの桃山御殿の一棟を寄進せしものと云ふ。その内部の障壁には狩野元信・永徳山樂・探幽等名匠の筆になりし金碧極彩色の繪畫を畫けり。特に「水呑の虎」は入口に膾炙す。又大方丈の前庭は小堀遠州の作と言ひ、俗に「虎の子渡」と稱し著名なり。小方丈に後醍醐天皇御愛用の輿、和蘭製古渡之椅子等數多の寺寶を陳列せり。鳴瀧の間は天皇御休みの間として知らる。時に暮色漸く深く東山聖蹤の嶺に明星の輝きさへ見たれば乃ち寺を辭し一路旅宿に向ひ車を馳す。かくて第三日の行程も無事終了す。

十一月二日 水曜日

明れば愈々最終日なり。一行は二手に分れ一は諸教授並に中村平山兩君の一行にして御所及び二條離宮を拜觀すべく八時半旅宿を出發。他は拜觀規定に洩れたる殘留組にして少しく遅れて清水寺に向へり。前の一行は八時四十分二條離宮に至り休憩室にて時を待つ。定刻九時を過ぐるこゝと十分餘にして職員に伴はれ東側の大手門より枳形を南に廻り唐門を過ぎ北に行けば桃山時代の特色ある御車寄に至る。元來この殿舎は徳川家康が京都に於ける宿邸として建造せしものにて、秀頼家康の會見を始め、家光の將軍宣下、慶喜の大政奉還等皆この城に於て行はれたり。玄關より正面には大名の控所たりし遠侍の間、虎の間あり。次いで式臺間あり。更に進めば徳川慶喜の大政奉還の上表が行はれし謁見の間あり。その上段武者かくしは型の如く、又その左方に見ゆる庭園は小堀遠州作と傳へられ、六躰三略の所謂八陣の構に則りし八陣の庭あり、庭園の一隅僅かに本丸を見る。往昔宏壯なる天主閣を擁

し、雄大なりし英姿も今はこの殿舎にその偉を止むるのみ。謁見の間の奥に内謁見の間あり。一に黒書院と言ふ。これ譜代三家との謁見に用ひられし所にして、又大政奉還の議定の行はれし歴史の舊跡たり。隣接して白書院あり。本丸焼失後將軍の居間たりき。その襖杉戸は狩野家一派の名畫に飾られ、床・違棚・御納戸など何れも善美を盡したり。白書院を一巡し再び黒書院に戻り、謁見の間の反對側なる菊の間、一に扇の間を経て、左中の間・勅使の間を通り、遠侍の間に出で拜觀を了へたり。時に十時。直ちに市電にて御所へ向ひ、堺町御門前に下車。

現存の御所は安政二年將軍家定の造營に係るものにして、安政の皇居と稱す。左方に宜秋門を見、御車寄を左にして進み、左折すれば兩陛下の新御車寄あり。それに續き第三朝集所あり。更に進みて月華門を潛れば紫宸殿前に出づ。殿上にはなほ高御座を中央に、御即位式の調度そのまゝに置かれあり。書畫に見し當年の御盛儀を思ひ出でられて莊嚴の中にも懷舊の念やむ能はず。左近の櫻・右近橋も亦思ひ出でるよすがにて、我知らず敬虔の念に驅られたり。向つて右に月華門、左に日華門ありこれを巡つて軒廊あり。正面に承明門あり、更に日華門を潛りて進めば御即位式の際、御侍所を供奉せし御本殿あり。その西側に沿ひ、北に進み、小御所・御學問所・常御殿を拜觀し、前庭の清淨閑靜なる山池に心を清めながら、更に引返し、紫宸殿の西側に沿ひ、北に進みて清涼殿前に出づ。前庭には河(漢)竹・吳竹あり。廊に沿ひて御川水の流れ清く、瀧口の陣前に落つ。瀧口の方より荒海障子・弘徽殿御局・夜御殿・朝餉間等を拜觀し、更に南側に廻りて殿上・西渡殿・

主殿司・落板布・櫛形等を拜觀す。殿上は大臣公卿の祇候所なるが、防寒の設備殆ど見えざれば、火櫃二つ置いただけにては、嚴冬の寒さ偲ばるゝ心地せり。之れを曩に拜觀せし二條離宮に比すれば、申すも畏き極みながら、前者が所謂桃山風を象徴して豪華華麗を極めたるに對し、その清淨簡素なる、寧ろ神殿をすら思はしめ、暫し敬虔の念に打たれたり。かくて十二時、御所を退下し、直ちに車を走らせて四條矢尾政に向ふ。

清水寺に向ひし一行も約に従ひて既に早く他班の來着を待ゐたりしかば、一同直ちに晝餐を共にし、ついで屋上に昇り、洛中の風光を賞し、一時半再び車を驅つて五山の一なる相國寺に向ふ。寺は臨濟宗相國寺派の本山、永徳二年足利義滿の造立にかゝる。乃ち刺を通じて寶物拜觀を請ふ、然るに寺男出で來りて毎年十月一般に公開する外は、觀覽を許さじとのことなりしかば、やむなくその建物のみを拜觀することとせり。本堂は永徳二年の創立なるも、爾來數度の兵火にかゝりしかば、慶長十年豊臣秀頼の發願により再建せるものなり。無畏堂とも稱し、釋迦如來・迦葉尊者・阿難尊者を安置せり、何れも運慶の作と傳へ、仰板蟠龍の繪は狩野元信の筆に成ると言ふ。本堂の東に祖堂あり。應仁の兵火後、寛文年間に再興せしもの、更に天明の火災に焼失せしが、文化四年恭禮門院の舊殿を賜はりて復興せしもの。南禪寺の大方丈が慶長時代の清涼殿なると共に、今日の皇居建築と對比し、大に興味を覺えたり。二時二十分寺を辭し、直ちに西本願寺に向ふ。途中占部教授は一行に別れ、兩松本教授も旅宿まで同行の上、嵐山の清遊を試むべく別を告げられたり。

旅宿に憩ふこと暫時にして、一行は阿彌陀堂門より入り、宗務所に至り來訪の由を告げ、寺僧の東道に従ひ、先づ虎の間より入り、鶯張の長き廊下を通り、太鼓の間なる小室に至る。此處にて茶菓の饗應を受け少憩す。寺傳によれば太鼓の間は桃山時代に秀吉が首實檢に充てたる所なりと言ふ。

程なく案内者來り、之れに従ひて浪の間に至る。浪の間の浪は虎の間の虎と共に狩野永徳の筆になる。更に進めば左側の白洲に古雅なる能舞臺あり。北能舞臺と名づけ天正九年落成せし、本邦最古のものと稱せらる。別に南能舞臺と稱するあり。桃山時代中期の建築と推せらる。伏見城の遺構といふ。更に右折すれば雀の間あり。竹雀の圖は圓山應瑞の筆になる名畫なり。次いで菊野の間あり。これを右に折れ白書院に至る。白書院は紫明の間・二の間・三の間・北及び西の狭屋・裝束の間に別る。室は甚だ華麗にして、殊に紫明の間は桃山時代藝術の粹を集め、仕切欄間の藤花の透彫の如き、二の間正面の「牡丹に尾長鳥」の透刻と共に、當代の絶品たるを失はず。その床脇棚附書院等書院建築の範たるべし。蓋し紫明の間は秀吉の居間たりし部屋にて當時の秀吉の生活狀態も亦以つて推知せらるべし。三の間の樓と孔雀の圖も手法秀麗にして春日和煦を偲ばしむ。狩野秀信の作と傳ふ。次いで鴻の間に至る。この間は書院の南方の大部分を占め、其の正面大欄間に左甚五郎の名作「雲中飛鴻」の透彫あるによりこの名あり。往昔秀吉の公式對面を使用せし所にして三段に分たれ、上上段は陛下の御座所にて、奥行一間半、前が左端より二間半の特別區域をなす。陽成天皇・後水尾天皇・孝明天皇・明治天皇皆玉座をこゝに

置かせ給へり。つぎに上段は之れにつゞきて一段低く、一間半に六間半、下段は九間四面百六十二疊敷の大廣間にして室内や、暗けれど、却つて豪宕華麗に一層の深みを添へ、前方には板張りの廣椽、左側には疊敷の縁座敷を附したるは藤原時代の寢殿造、廂の間の遺風にして桃山時代書院造の一特色なり。その床の間の繪畫は「張良引四鶴謁惠帝圖」にして、右方張臺構の「武帝會西王母圖」と共に狩野探幽畢生の大作なり。今之れを以て二條城の謁見の間に比する時その豪壯華麗更に一層大なるものあるを感ぜざるを得ず。眞に一代の英雄秀吉の面目を偲ばしむ。吾等は下段の下座に靜座してしばし封建桃山の幻想を畫き、豊臣氏の末路を偲びて感極まれり。

御影堂を一巡し寺の東南隅なる滴翠園に至る。同園は清楚閑寂にして雅致に富み、當に天下の名園なり。之れ亦豊太閤聚樂第の遺構にして、世の嘆賞措かざるところなり。就中著名なるは飛雲閣と黃鶴臺なり。飛雲閣は金閣・銀閣と並び世に所謂三名閣の一なるもその構造は最も複雑にて上層は實形造、中層は寄棟と軒唐破風造、下層は入母屋切妻と軒唐破風造をなし外見上三層の如きも、内部は四層をなせり。初層には徒歩にて來る人に對する玄關なく、「お船入」と稱し、船より石階を登り直ちに座敷に上る仕組となれり。之れを船入の間といふ。その他柳の間・八景の間・茶室等あり。中層は二段となり、歌仙の間といふ。四面の表裏に畫かれし三十六歌仙の圖は狩野山樂の筆なりといふ。上層二間四方にて摘星樓といふ。

樓を下り、柳の間より廻廊をつたひ黃鶴臺に至る。こゝには蒸

風呂の遺構あり。聚樂第の湯殿をその儘移せしものにして、三室よりなり。その中二階は脱衣場にして淡彩壁畫を描けり。室の正面は池に面し、浴後涼をとるに適せり。その後方に控室、その奥に浴室あり。浴室は南北二間半東西三間、その左寄に置かれたる向唐破風造家形の箱は即ち古へのまゝの蒸風呂なり。園の東北隅、滄浪池に臨み鐘樓あり。その梵鐘は洛西太素廣隆寺の古物にて、少納言信西の銘あり。現に國寶たり。

更に勅使門を見る。一に日暮門として有名なり。此門は伏見桃山城の遺構にしてその規模裝飾の豪宕華麗なる眞に日暮門の名に背かず。

巡覽こゝに一時間半、四時三十分、西本願寺を辭し、かくて五日四晩に互る見學旅行を無事終了せり。乃ち一行は五時半、圓山なる平野屋に集まりて最後の晚餐を共にし、こゝにこの見學園を解散せり。願れば今次の旅行は幸に天候に恵まれ、愉快に實地研學の効果を擧げ、大いに史實を肥すを得たりしは、我等の本懐とするところなり。最後に旅行前、種々の指導を賜はりし伊木先生を始め、各地に於て吾等一行の便宜を計られし諸賢に對し厚く感謝の意を表す。(横田實記)

アフガニスタンに關する講演 及び展覽會

本塾文學部は、本年一月廿六日日佛會館學長として滯京中のジ